連載エッセイ・第34回

「わかっちゃいないのである」

鈴木一誌

新宿でひとと待ちあわせるさい、紀伊國屋書店・本店二階の文庫売場とするときがしばしばある。どちらかが多少遅れても、多彩な文庫を眺めていれば退屈しない。エスカレータで昇ったところにある便利さもよい。ひとと会うおりばかりでなく、適度な雑然さが好ましく、このフロアをよく利用する。最近、興味深い人物をみたび見かけた。

岩波文庫やちくま文庫の書棚前で読書に熱中しているのだ。「立ち読み」ではない。座りこんで、版画家・棟方志功のようにページぎりぎりにまで顔を近づけ、虫眼鏡で文字を追う。性別は、職業や生活ぶりが判然とする身なりではないので、確信はないがたぶん男性だろう。なんの本を読んでいるかは確かめようがなく、想像するに、場所からして、娯楽系ではない文学だろう。読書に集中しているようすは、彼の隣で本選びをしていても不快ではない。

書店でアルバイトをした経験のある友人に聞くと、印象に残る「立ち読みびと」は店ごとに存在するらしく、毎週土曜日に決まって訪れ、同じ本を読みつぐ人間がいると聞いた。本を読みつづける立ち読みびとといえば、つぎのようなやりとりを女性エッセイストのコラムで読んだことがある。あるとき書店員がいたずら心で、「同じ本」のしおりの位置をズラしておいたところ、訪問者は平然と先週の続きを読みはじめた……。

本屋ではなくビデオレンタル店だが、毎週土曜日の夜10時30分に現われ、かならず同じ作品、『スリー・リバース』（アメリカ映画、ローディー・ヘリントン監督、1993年）の吹き替え版を借りていく、そんな客がいたそうだ。ビデオレンタル店長を勤めた体験をもつ映画評論家・谷岡雅樹が書いている挿話だ（『Vシネマ魂』四谷ラウンド、1999年）。

ふつうには、「毎週借りるくらいならば、買ってしまったほうがよいのではないか」と考えるが、さまざまに存在するのが人間なのではないか。谷岡は、このエピソードを「わかっちゃいないのである」との一文で終える。書き手の、「他人のことなど、なにもわかっちゃいない」との冷徹な自戒が伝わってくる。

ブックデザイナーにとっては驚いてしまうアンケート結果が新聞に載った（「当世ふところ事情」『日本経済新聞』2013年2月16日朝刊）。「本や雑誌代、1ヵ月いくら?」に対して、47パーセントが1000円未満だというのだ。成人既婚男女の618人が回答を寄せたこの調査では、さらに24パーセントのひとが「本や雑誌を買わない」となっている。つまり、7割以上の既婚男女におけるひと月あたりの本や雑誌代は1000円未満かゼロ、となるのだ。文庫はともかく、ブックデザイナーが手がける書籍のほとんどは定価1000円以上なのだから、職業の先行きを嘆きたくなる数字なのだが、統計を信じすぎるのはやめようとも思う。

紀伊國屋書店の「座り読みびと」は、まさに「本や雑誌代が1000円未満かゼロ」なのかもしれないが、この人間の一心不乱な読書はけっして数字には表われない。他者の読書についても、なにも「わかっちゃいないのである」。「本や雑誌を買わない」としたひとも図書館で読んでいるのかもしれない。書物の購買は数値となって残る。しかし読書という行為は、数字には置き換えられない。ブックデザインは、見えない読者を見ようとしなければならないのだろう。2012年末の衆議院選挙で、投票所に赴かなかったおよそ6割の選挙民が、なにをどう考えているのか。なにも「わかっちゃいないのである」。

（すずき・ひとし／グラフィック・デザイナー。題字デザインも筆者）